

学級経営の充実と個が生きる集団づくりの在り方

～半田市立さくら小学校の実践から～

温かな居場所をつくる学級経営

教え合う授業の充実

自分の力で解く

まずは自分で解いてみる。

友達に聞いてみよう。

友達同士で教え合う

自由に席を立てて聞きに行ってもよい。



友達に教えてあげよう。

全体で確認する

こうやって教えてもらったよ。

全体で解き方のまとめをする。

基礎基本を身に付ける授業

各単元の自学プリント

1～6年までの各単元プリントを用意する。

自分の力や目標にあったものを選び、取り組もう。

自分で選択し意欲的に解く

学んだことの確認をしよう。

できるようになったよ。

主体性の向上

学ぶことの予習をしよう。

勉強の仕方がわかったよ。

学力向上

絆が深まり個が生きる集団づくり

ペア活動の充実

ペア学年（1・6年、3・5年、2・4年）により、レクリエーション活動等を行う。低学年をいかに楽しませるかを考えながらリーダーシップをとって、高学年は主体的に活動を行う。

3・5年生のペア活動「お化け屋敷をしよう」

5年生の児童は、学年として3年生を楽しませるためには、どうするべきかを考え、大道具部、小道具部、コース作成部、仕掛け作成部に分かれ、活動を行った。それぞれのグループのリーダーを中心に児童主体で準備を行った。



【ペアですごろく】

すごいな！5年生の人みたいにになりたいな。

活動で深まった絆で、様々な活動を楽しめるね。

研究実践の成果

児童の主体性を大切に様々な学習や特別活動を取り入れたところ、「学校が楽しい」、「授業が楽しい」というアンケートの結果が、10%～30%上昇し、ほぼ100%となった。児童には自信が見られ、取組にも積極性が増し、自己有用感や自己肯定感の高まりを感じた。

自己有用感を味わわせ、自己肯定感を高める

学級経営の充実と個が生きる集団づくりの在り方

多くの人と関わることができる学校生活は、子供たちにとって小さな社会と言えます。学級を子供たちにとって安全で安心な場とすることや、学校生活の中で自分を輝かせながら、周りの人と協働的に学ぶ経験をする事は、子供たちが「共生的に生きる力」へとつながります。

愛知県生徒指導推進協議会では、令和元年度から2年間にわたり、「学級経営の充実と個が生きる集団づくりの在り方」をテーマに研究してきました。本リーフでは、本テーマに基づいて作成した「生徒指導リーフ」No.8-1（理論編）をもとに実践した小・中学校での取組を紹介します。

研究主題

中学校実践編

学級経営を基盤とした個が生きる価値との出会い

～蟹江町立蟹江中学校の実践から～

研究の概要

◆1 目指す生徒の姿

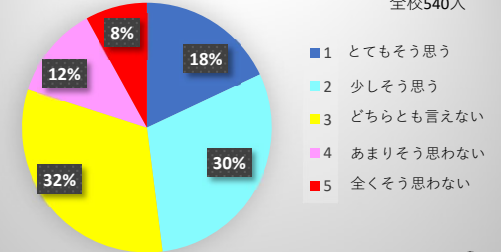
- ① 自分自身を振り返り、自らのよさと成長を実感できる生徒
- ② 他によさに気づき、認めることのできる生徒
- ③ 自らのよさを生かし、他と共に成長することができる生徒



◆2 アンケート結果

「勉強や運動で自分は友人から認められていると思うか」というアンケートでは、**否定的な回答をする生徒は、20%であった。**「どちらとも言えない」生徒と合わせると**約半分以上の生徒となった。**これは「自分が認められていると思うか」という質問でも**同様の傾向があり、自分に自信がもてない生徒が多い**と言える。

勉強や運動、特技等で友人から認められていると思う（全校540人）



◆3 手立てと実践内容

- ① 温かな居場所をつくる学級経営
 - ・ 「振り返りシート」を活用した、振り返りの場の設定
 - ・ クレペリン検査とhyper-QUにより、個と集団の特徴の把握と検証
 - ・ 掲示物の工夫を用いた、生徒が安心して生活できる居場所づくり
 - ・ 1年間の見通しをもった学級経営の方針づくり（学級を振り返る場の設定）
 - ・ 学級目標を軸とした、PDCAサイクルの実施
- ② 絆（きずな）が深まり個が生きる集団づくり
 - ・ 話し合いの場の工夫（話し合いにおけるルールづくり）
 - ・ 学級（学年）のルールづくり
 - ・ 学級の実態に即した、係・委員会・当番活動の実施
 - ・ 「集団の中の個」という認識における、**支え合う集団づくり**
 - ・ **定期的な学級目標の達成状況の把握と、実態に即した目標を設定**



【蟹江中の実践は2・3ページに】

温かな居場所をつくる学級経営

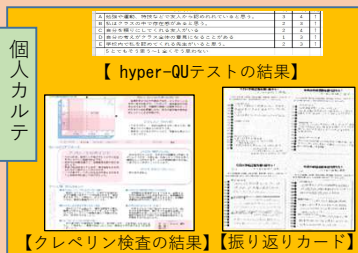
学級経営を基盤とした個が生きる価値との出会い

絆が深まり個が生きる集団づくり

学級を見つめ直す教師

クレペリン検査・hyper-QUの活用

- 各種検査により個と集団の特徴を把握し、学級経営に生かす。
- ・1年生クレペリン検査（5月）
（個人の性格や行動ぶりがわかる検査）
- ・2・3年生hyper-QU（7月）
（学級集団の満足度と意欲、集団の状態がわかる検査）
- ・hyper-QU研修会（8月）
- ・hyper-QUの2回目実施（11月）



【検証例】
昨年度までの様子から、交友関係に注意をしながら、認められる部分を増やしていった。振り返り用紙には大きな変容は見られないものの、アンケート結果は大きく変化しており、また、担任視点からも、昨年度に比べ明るく、様々な場面で頑張るようになった様子が見えてくる。

個人カルテを個人の指導・支援に生かす。

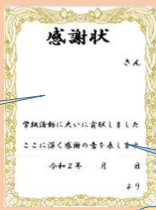
感謝状・振り返り用紙を学級経営にフィードバックする。

学級を見つめ直す子供

感謝状の活用

1か月間友達の様子を見て、良いところを感謝状として書く。

いつも教科連絡をしっかりと聞きに行ってくれて、助かっています。



給食の時にみんなに呼びかけをしてくれてありがとう。



感謝状は毎月月末に記入（一人2枚）、その際、以下の2点を配慮している。

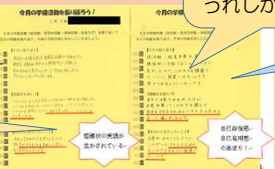
- ・一人1枚以上必ず渡すようにする。
- ・同じ人ばかりに、ならないようにする。

感謝状を受け取った後は、振り返り用紙の「感謝状を読んで」と「来月から生かしたいこと」を記入して振り返りをする。

今月の学級活動の振り返り

自分を見つめるいい機会になった。

役に立てるようにしたい。



自分もクラスのためにできていたと思えて、うれしかった。

クラスの役に立つように、頑張りたい！



話し合いの場の工夫

個人→班（4人）→クラス全体→個人（振り返り）という流れを取ることで、一人一人の意見を出しやすくし、一人一人の意見が全体の意見にも反映されやすいように工夫をした。この話し合いについては、各時間に行った。

全体では発表しにくいことも、グループなら言いやすいね。



話し合いステップ表の活用

話し合いのとき、自分の言いたいことだけを話すのではなく、つながりや、共感、考えの深まりなどに生かせるように話し合いステップ表を活用する。学活・総合、各授業で行った。

話し方・伝え方	ステップ	話し方・伝え方
話している人の考えを聞いて、自分の考えを深く確かめる（〇〇と考えていたけど、聞いた後の自分の考えは△△）	4	場面に応じた効果的な方法を選び、聴いている人の反応を見ながら話す（例を挙げる、視覚的な資料を使う）
話している人の考えと自分の考えを比較しながら聴き、感想や意見をもつ（～の考えは同じだが、〇〇は△△だと考えます）	3	根拠や理由などを挙げながら、筋道を立てて話す（～の資料から、〇〇と思います、具体例を出す、比較する、数値化する）
内容を理解しながら聴く（話の流れを意識する、リアクションをとる）	2	対象や目的に応じて、伝えたいことの中心が伝わるように話す（結論→理由・具体的に話す）
話している人の方を向いて、反応しながら聴く（うなずく、好感的に聴いている態度を示す）	1	聴いている人の方を向いて、場に応じた声の大きさではっきりと話す

学級目標決めにおける合意形成

【話し合いステップ表】

年度の初めは1年間の学級生活への期待と不安をもつ。互いの心をついにまとめ、ものの考え方や行動のより所となるような学級目標を、学級全員で話し合っで決めた。そして、その学級目標の柱を意識させることで、「目標→結果」でなく、「目標→過程→結果」に着目させた。学年目標を年度当初に決めたままにせず、行事や学期ごとの区切りにその達成度を評価するとともに、目標に修正を加えることを目的に行った。そして、その過程を通して合意形成のサイクルを学ばせた。



学級目標はみんなの気持ちの表れだね！

- Plan**…年度当初に学級目標を決定する。個人の意見を出し合い多様な価値観を尊重しながら目標を形成していく。
- Do**…その目標の下で、他の友達と協力しながら、共に学級での学習、行事に取り組んでいく。
- Check**…Doの後に振り返りを行い、目標の達成度を点検する。個人の振り返りを基に、学級全体の評価で更に振り返りを行う。
- Action**…次の行事（学期）では、その評価に基づいて、自分たちの現状に合うように、改善の工夫をする。

【学級目標の振り返り】

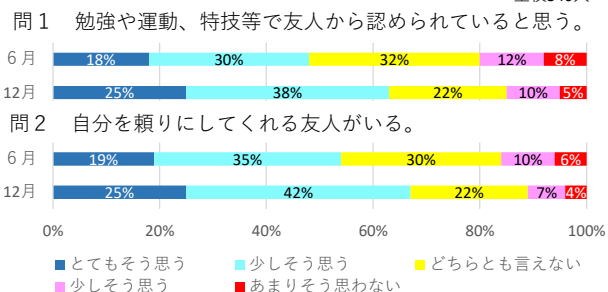
自分の意見だけではない、人の意見だけでもない、そんな学級の目標が作れた。振り返りを生かして、更によい目標にしていこう！

研究実践の成果

◆ 取組の成果

- ① hyper-QUアンケート結果（変容）より、全体の傾向として、自己肯定感・自己有用感の特に低い生徒の数が減っている。抽出生徒においても、昨年度まで自己肯定感・自己有用感が低かったり、問題行動が見受けられたりした生徒の様子が良くなった。
- ② 授業での話し合いの場面では、話し合いのルールを徹底させ「個人→班（4人）→全体」という流れをとり、P D C Aで学級目標を考えることで、合意形成や意思決定をすることができた。
- ③ 毎月の振り返りだけでなく、行事、道徳、学活等、様々な場面で節目節目に振り返りを行うことで、一人一人が個人の成長を自覚することができた。

自己有用感・自己肯定感に関するアンケート（全校540人）



今後の実践の充実に向けて…

- ① 今年度はクレペリン検査を行ったのは1年生だけであった。しかし、個を把握する上で大変効果的であったので、全学年4月に行えるようにしていきたい。
- ② アンケート結果より、学年・学校全体としては、自己肯定感・自己有用感が高まったと言える。一方、個に目を向けると、大きく下がっている生徒もいる。しかし、アンケート結果や振り返りの変容を見る限り自己肯定感・自己有用感が低くなっている生徒でも、周りの生徒からはきちんと認められている場合もある。クレペリン検査、hyper-QUアンケートなどのアンケート結果には表れない生徒一人一人の良さや頑張りを認めていく（認める機会を作る）ことが今後の課題である。
- ③ 今回の実践を継続すると同時に、「教科指導」や「総合的な学習の時間」とも連動させながら、修正を重ね取り組んでいく必要がある。